京都市文化観光資源保護財団

会報

No.52

会報題字　理事長　佐伯　勇
表　　紙　三条通白川橋道標

もくじ

京のよさをまもって(15)「鴨川をどりいまむかし」
先斗町歌舞会会長　吉井　道忠　P 4
古い寺に住んで(29)　要法寺貫主　嘉儀　日有　P 6
京のみちを歩く(12)「嵐山ともみじ祭」　P 7
目で見る京の文化財(22)「京の石造物(II)～道標～」　P 8
わたしと京の文化財(18)「冷泉家の伝統」　冷泉貴実子　P 9
文化財あれこれ(1)「京都国体を控えて」
京都六斎念仏保存団体連合会会長　渡辺　泰男　P10
京の伝統行事芸能(15)「二十五菩薩お練り供養法会」
即成院住職　平野　暎哉　P12

会　報
No.52　1988. 10. 1

編集・発行
財団法人　京都市文化観光資源保護財団
京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606　電話　075－752－0235（代）

募金にご協力いただき
ありがとうございました

寄付者芳名録（敬称略）63.4.25～63.8.11

―法人及び団体の部―

〔特別会員〕

※住友信託銀行株式会社　〈1,700万円〉
※三井信託銀行株式会社　〈1,700万円〉
※東洋信託銀行株式会社　〈1,100万円〉
※安田信託銀行株式会社　〈1,100万円〉
※京都旅館不動産株式会社　〈250万円〉
※永和化成工業株式会社　〈90万円〉
※厚木市立睦合中学校生徒会　〈77万5千7百4拾6円〉

〔普通会員〕

※京阪コンクリート工業株式会社　〈46万円〉
※株式会社灰孝本店　〈46万円〉
※株式会社前田英工務店　〈36万円〉
※山田繊維株式会社　〈34万８千円〉
※株式会社鶴屋吉信　〈34万円〉
※織悦株式会社　〈28万円〉
※厚木市立厚木中学校３年生　〈23万3千8百6円〉
※旅館 松葉亭　〈23万円〉
※株式会社西陣まいづる　〈21万円〉
※京都生花株式会社　〈16万円〉
※株式会社トキワ商事　〈12万円〉
※株式会社土井志ば漬本舗　〈11万円〉
※株式会社吉田山荘　〈10万６千円〉

〔賛　助　員〕

※厚木市立玉川中学校生徒会　〈9万5千3百3拾円〉
※株式会社丸美屋　〈７万円〉
※向井石油株式会社　〈３万６千円〉
※株式会社岩佐商店　〈３万円〉
法　傳　寺　〈２万円〉

―個人の部―

〔特別会員〕

※高　島　国　男　〈22万円〉
※岡　本　保　止　〈19万２千円〉
※奈　良　行　博　〈18万円〉
※柴　田　二　郎　〈16万円〉
※高　橋　一　男　〈15万円〉
※山　崎　　章　〈15万円〉
※弘津友三郎　〈13万円〉
※佐　藤　昭　三　〈12万円〉
※中　島　次　郎　〈12万円〉
※田　尻　正　雄　〈11万９千円〉
※村　田　陶　苑　〈11万５千円〉
※三原慶三郎　〈11万３千円〉
末　沢　　武　〈10万円〉

〔普通会員〕

※小　野　初　恵　〈９万１千３百円〉
※加　藤　雅　一　〈９万１千円〉
※安　田　孝　夫　〈８万８千円〉
※戸　田　紀　一　〈８万１千円〉
※岩　井　貞　三　〈６万６千円〉
※藤　本　忠　利　〈６万５千円〉
※辨　官　弘　晃　〈６万５千円〉
※小林多三郎　〈６万円〉
※横　山　政　二　〈６万円〉
※平　野　昭　子　〈５万８千円〉
※田　村　芳　子　〈５万７千円〉
※青　木　文　子　〈５万３千円〉
※米　谷　栄　二　〈５万円〉
※今　井　憲　一　〈４万８千円〉
※遠藤伊之助　〈４万６千円〉
※井田喜智郎　〈４万５千円〉
※小田嶋　　弘　〈４万５千円〉
※金　井　利　夫　〈４万５千円〉
※平　野　和　彦　〈３万９千５百円〉
※駒井桂之助　〈３万９千円〉
※西　原　寿　子　〈３万５千円〉
※舟木八重子　〈３万２千円〉
※山　田　順　三　〈３万２千円〉
※野　村　鉄　治　〈３万１千円〉
※小　松　好　子　〈３万円〉
※寺　嶋　　瑛　〈２万９千円〉
※盛　田　准　子　〈２万７千円〉
※渡　辺　き　く　〈２万６千円〉
※梶村ふみ子　〈２万５千円〉
※小　林　幸　子　〈２万５千円〉
※高　木　春　代　〈２万４千５百円〉
※垂　水　　稔　〈２万３千円〉
※福　田　哲　也　〈２万３千円〉
※佐　村　伸　一　〈２万２千円〉
※西　田　　實　〈２万１千円〉
※奥　村　賢　三　〈２万円〉

※山　田　庫　市　〈２万円〉

〔賛助員〕

※足　立　好　美　〈１万５千円〉
※小　林　　文　〈１万５千円〉
※森　田　俊　子　〈１万４千円〉
※福　崎　　勲　〈１万３千百円〉
※岸　本　幸　子　〈１万３千円〉
※渡　邊　智　恵　〈１万３千円〉
※佐藤ふく子　〈１万２千円〉
※渡　辺　澤　子　〈１万２千円〉
※山　本　春　美　〈１万円〉
伊勢戸　　和　〈１万円〉
※大　田　拓　介　〈１万円〉
※渡　辺　　楽　〈１万円〉
※吉　川　克　枝　〈９千円〉
※奥　野　貴　雄　〈７千円〉
※環　　直　弥　〈７千円〉
※桜田弥左衛門　〈６千５百円〉
※市　川　延　繁　〈６千円〉
※高　沢　き　み　〈６千円〉
※竹　林　は　ま　〈６千円〉
※前　川　貞　一　〈５千百円〉
※稲生千代子　〈４千円〉
※田　中　ぬ　い　〈４千円〉
※竹　下　喬　子　〈４千円〉
※八木ユキエ　〈４千円〉
※湯　浅　蓮　枝　〈４千円〉
※井　上　　豊　〈３千円〉
林　　清　子　〈３千円〉
小　崎　か　づ　〈２千円〉
小林三千子　〈２千円〉
※坂　本　　亘　〈２千円〉
長　命　絢　子　〈２千円〉
南　草　次　子　〈２千円〉
※安　田　ま　さ　〈２千円〉

※印は、追加寄付の篤志者。寄付金額は、累計額。なお、昭和63年８月11日以降の寄付者の方につきましては紙面の都合により今後、順次紹介させていただきますので御了承下さい。

京のよさをまもりましょう！

―京の文化財をまもるこの運動への参加を
あなたのまわりの方々にも呼びかけて下さい―

当財団では、現在５億円募金運動を全国的にすすめています。

京の四大行事をはじめとする京都の文化財をまもる５億円募金を達成するために皆様も金額の多少にかかわらずご協力をお願いいたします。

○新たに基金にご協力いただきます場合は、同封させていただいております納付書によりご送金下さい。

募金その他についてのお問いあわせは、当財団事務局まで

☎（075）752－0235㈹

京のよさをまもって（15）

鴨川をどり いまむかし

吉井道忠

鴨川をどりは、東京遷都によって衰退した京都の繁栄を願い開催された京都博覧会の付博覧として、時の京都府槇村参事官の勧誘を受け、明治５年３月、裏寺烏須沙摩図子の千代の家席で創演されました。歌詞は、横井勧業課長の作で都の賑、鴨川踊（雲井の庭）と題し，御所の栄えと全国勧業を詠った総踊一幕物でしたが、作曲杵屋正蔵、振付篠塚文三の芸妓総出演の華やかな舞台は大変な好評を博しました。踊り子左右12人、地方10人、義太夫節２人、囃子は笛１人、太鼓２人、小鼓２人、大鼓２人、観覧料は一朱と記録されています。

この時の小屋は狭隘で、楽屋は北隣の烏須沙摩明王を祀る大龍寺の庫裡客間が急場凌ぎに当てられましたが、時ならぬ闖入者に明王もさぞ困惑されたと思います。そこで明治８年、歌舞練場として拡張改築、明治16年まで12回の公演を続けました。観覧席の両側に地方、囃子方を並べる形式や立礼式点茶席は、この時考案されたものです。明治17年より27年まで不況の為、遺憾乍ら中断のやむなきに至りますが、明治28年平安遷都千百年記念にあたり今の地に翠紅館鴨涯歌舞練場を新築、13回目の公演で再開しました。

その後次第に歌曲も長くなり、各場面に分れたり踊り子少女を出演させたり、更に明治14年には中挟みといった独立した踊りを加える新趣向をも用いましたが、演目は依然として勅題を主題とした風光や昔の行事を美しい歌詞に詠み込んだ単調なものでした。

昭和２年、旧歌舞練場の構造では飽き足らず大改造のうえ、近代的劇場を完成、中内蝶二、山岸荷葉氏等、本格的劇作家に脚本を依頼、振付も若柳流となって次第に劇的要素の多い舞踊と変って来ます。又、長唄、常磐津、洋楽、和洋合奏、更に別踊り、少女レビューも参加、懸賞入選作の上演等常に積極的に新機軸に取り組んだのです。

国際色豊かな鴨川をどり

昭和11年、中内蝶二作「踊る東海道」は五十三次を舞台で踊り抜くといった画期的演出が話題となり、ラジオ中継もされ、ジャン・コクトー氏より日本で最も鮮やかで美しい印象と過褒の言葉を頂き、チャリー・チャップリン氏も此の頃来場激賞され、ようやく京都の年中行事として海外にまで喧伝されるようになって来ました。

しかし、次第に日本の誇、御国の花、

立礼式お茶席

南進日本、日本刀、女性進軍と花街に不似合な演目が続き、逐に昭和18年61回を以って戦争の為、休止する事となりましたが、昭和21年には荒廃した社会情勢の中、物資不足、GHQ 検閲等重なる困難と戦って逸早く再開、多くの人々に夢と希望を与え、以後の花街舞踊隆盛の魁となったのです。

昭和26年春、「鴨川をどりはヨーイヤサー」と両花道を出て来た今までの幕開けは一変し、硝煙弾雨のなか緞帳が揚がる本格的な舞踊劇吉川英治原作、林悌三脚色「太閤記」が誕生したのです。この時より尾上流も加わり今まで歩んで来た道を更に高度なものにしようとする新企画は爆発的な好評で迎えられ、「名婦シリーズ」吉野太夫、中将姫、静御前、「新古文芸作品の舞踊化」雨月物語、山椒太夫、西遊記と鴨川をどりの演劇性が確立され、又、折から観光ブームに遠来の方々にも京情緒を充分満喫して頂こうと、京の風物を主題とした組曲舞踊との併演は一層の人気を呼びました。

華やかな鴨川をどりの舞台

昭和57年、創演110年記念公演を契機に海津勝一郎氏を招聘、出演者減少等多くの困難にもめげず新生鴨川をどりとして次の目標に向い力強く第一歩を踏み出したのです。

博覧会の余興として誕生した、いわゆる芸妓の手踊りは、この様な変遷を辿り乍らも常に前進を目指し、一世紀余に亘る伝統を護り、日夜孜々として精進を重ねています。

（先斗町歌舞会会長）

古い寺に住んで（29）

嘉儀日有

要法寺は、東海道の到着点三条大橋の近く東大路三条にあります。前貫主嗣法五十祖日運上人遷化の後、宗山大衆に推されて嗣法五十一祖の貌座を継承し、昭和61年（1986）７月28日、貫首に就任しました。住して早くも２年が過ぎ去りました。当山は、日尊上人建立の「上行院」と日尊上人の弟子日大上人建立の「住本寺」とが、天文の法難〔天文５年（1536）発生〕によって、一時泉州堺（大阪府堺市）にのがれ、６年後の天文11年（1542）京都にかえったとき合併し、名も新しく『要法寺』と改めたのです。そのときの地は、堀川綾小路で諸堂宇の落慶は、天文17年（1548）のことで、嗣法第十三祖日辰上人の代でした。ところが、豊臣秀吉の町割りによって天正19年（1591）寺町二条に移転を余儀なくされたのです。諸堂宇が落慶し、篤学高徳の僧が輩出し、要法寺の名声は天下にひびきました。

宝永５年（1705）京都の大火によって、要法寺も類焼し、同年８月加茂川を東へ渡った現在の地（当時は東河原町と呼称）に移転いたしました。早速、諸堂宇の建築計画がたてられ享保元年（1716）から安永９年（1780）までの約60年間に、ほぼ現在の状況近くまで整備がなされたのです。本堂は、嗣法第二十七祖日奠上人の代の天文４年（1739）に発願起工し、安永３年（1774）嗣法第三十祖日良上人の代に落慶をみました。この間、四代にわたる貫主と35年の歳月を要したのです。土壁は一切使用しない総欅造りで、寺院建築としては珍しい特色をもっています。用材の欅は、石見国志学（現在の島根県大田市三瓶町）の深山から伐り出され、江川を流水によって下し、日本海から関門海峡を経て瀬戸内海へ海運、淀川から高瀬川へ流水を逆のぼって三流河原へ陸上げされたのです。そこからは荷車で運ぶという方法によりました。

安永３年(1774)建立の本堂　土壁なしの総欅造の大木造建造物である。

要法寺

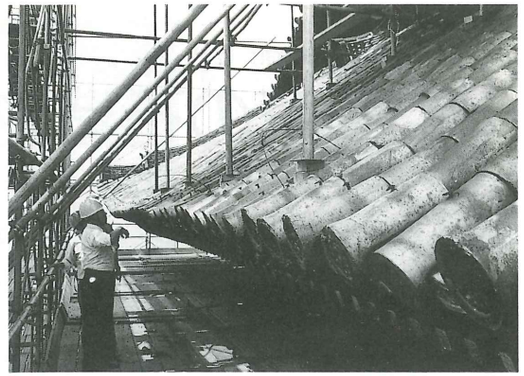
（京都市左京区法皇寺町448）

多宝富士山と号し、日蓮本宗の本山で開山は日蓮大聖人の法曾孫日尊（1265～1345）上人である。日尊上人は、日蓮大聖人、日興上人、日目上人と歴代の先上師が果し得ず、遺命した「法華経」の天奏を、北朝の正慶３年（1334）に後醍醐天皇、光明天皇に拝謁し果された。天皇は御感著しく、日尊上人を「二位法印」に叙し、紫の小袖と六角油小路に止住の地を賜わった。この地に「上行院」を建立したのが、本山要法寺のおこりである。

以来、血脈相承を受けた唯受一人の貫首が住し、嗣法五十一祖日有上人に到り、「師厳道尊」「給仕第一」の宗風は厳然として遵守されている。現在は、約50か寺の末寺が全国的に存在する。宗宝、霊宝等数あるなかで紺地金泥の法華経八巻、国指定の重要文化財「渡金蓮唐草透刻経筥」は逸品である。

いかに堅牢な建築物でも二百十余年の風雪で老朽化がすすみ、破損箇所は増えて参りました。諸堂宇とて同じことで大修復の時期が来たようで、先師日運上人の代、昭和60年（1985）に正門の全面修復はできましたが本堂大屋根の緊急大修復が一大課題となりました。全門末住職大会で日運上人は「我らの時代に悔を千載に残すことなからん！」と心情を吐露されたのです。その後機が熟し、門末僧俗「異体同心」となっていま本堂大屋根の「昭和の大改修」を終え、開山堂屋根の全面改修に歩をすすめています。日運上人は、これらの完工を見ることなく遷化されましたが、そのご遺志を奉じて「昭和の大修復」に不自惜身命頑張りたいと存じます。京都市文化観光資源保護財団からも助成をいただいたことはまことに有難いと存じています。

（要法寺貫主）



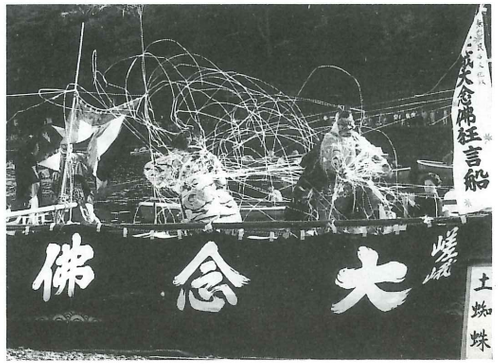
本堂創建以来、初めておよそ１年３カ月の歳月をかけ修理工事がおこなわれた。

京のみちを歩く（12）

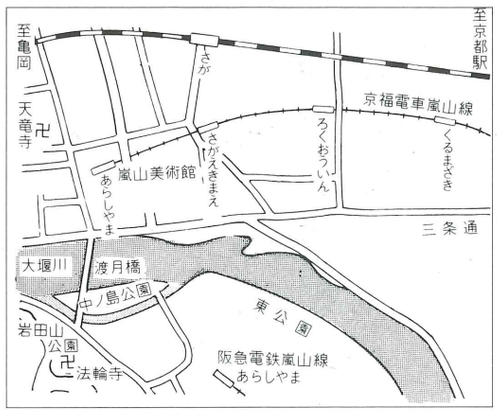
《嵐山ともみじ祭》

嵐山のもみじ祭は、毎年11月の第２日曜日に大堰川で催される。嵐山、小倉山の錦繡模様を川面に映して、王朝文化の再現よろしく今様船、嵯峨大念仏狂言船など船装いした飾船が色を添える。５月の三船祭とは趣旨が違うが、なかでも車折芸能船からは神社に奉納された扇が流され、祭の風情を盛り上げる。昭和22年11月に始められ、嵐山保勝会等の努力で続けられているこの祭典も今では秋の嵐山を彩る行事として広く親しまれ、古式花散華の大覚寺船、古笛尺八吹奏の天竜寺船に両川岸の人波は大きくゆれる。行楽の秋、もみじの嵐山、紅葉は人を楽しませてくれる。

―「京のみちを歩く」京都市文化観光局観光部発行より―



嵐山もみじ祭

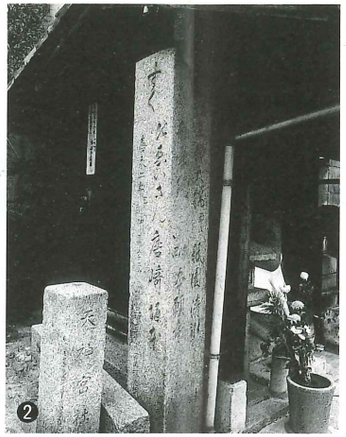


目で見る京の文化財（22）

「京の石造物（II）～道標～」

道標は、「みちしるべ」とも呼ばれ街道の分岐点などにたてられ、目的地までの行き先や距離が刻まれ、今日の道路標識や案内板の役割を果していました。現在京都市内には、数多くの道標があり江戸時代の年号を有しているものも多く残されています。しかし、都市の近代化とともに交通機関の変化や道路の拡幅工事などによりその価値も薄れ、又損傷の著しいものも少なくありません。

今回の目で見る京の文化財は、当時の交通の様子を知るうえで貴重な文化財である道標をテーマに、京都市の文化財として登録されているものを中心に一部をご紹介いたします。



①京都市上京区今出川通寺町東入。慶応４年（1868）の年号があり、四面に方角と目的地名が刻まれた京都に残る道標の最優品の一つ。京都市登録文化財。

②京都市左京区北白川西町。嘉永２年（1849）の年号があり、願主は某となっているが石工の名前が刻まれた最優品のもので、白川通の往時を偲ばせる。京都市登録文化財。

③京都市左京区吉田本町。宝永６年（1709）の年号があり、白川道の名残りをとどめるもので、かつて道路工事で破壊されていたのを中村直勝博士が復元保存に尽力されたもの。京都市登録文化財。

④京都市東山区三条通白川橋東入五軒町。延宝６年（1678）の年号があり、良質の花崗岩に彫られた文字には、ほとんど損傷がなく京都市内最古のもので東海道を京都にやって来た人々を対象に建てられたもの。京都市登録文化財。（表紙写真掲載。）

⑤京都市山科区御陵中内町。宝永４年（1707）の年号があり、旧東海道五条別れの分岐点にたっており、東海道の往時を偲ばせる。京都市登録文化財。

⑥京都市左京区岡崎東福ノ川町。正徳５年（1715）の年号があり、地名にふりがながつけられている珍しいものであるが、旧位置から移設され残されている。

⑦京都市右京区嵯峨野嵯峨ノ段町。文政７年（1824）再建の年号があり、嵯峨から京都市中への方角を示しており、往来の激しかった往時を偲ばせる。

⑧京都市右京区嵯峨二尊院門前長神町。文久３年（1863）の年号があり、愛宕山への常夜灯に道標を刻んだ珍しいものである。

⑨京都市東山区五条坂東大路東入。元禄13年（1700）の年号があり、五条坂の参道に三本の道標が集められており、大谷、清水の方角を示している。

⑩京都市伏見区下板橋町下板橋小学校内。天明２年（1782）の年号があり、旧位置から小学校々庭に移設され残されている。伏見に残る道標のうち最も古いもので、当時の伏見の様子がうかがえる。

参考文献
◦「京都の道標」出雲路敬直著（昭和43年）ミネルヴァ書房
◦「京の道標」塩見青嵐著（昭和41年）白川書院
◦「京都市の文化財」（第５集）京都市文化観光局文化財保護課発行

わたしと京の文化財（18）

冷泉家の伝統

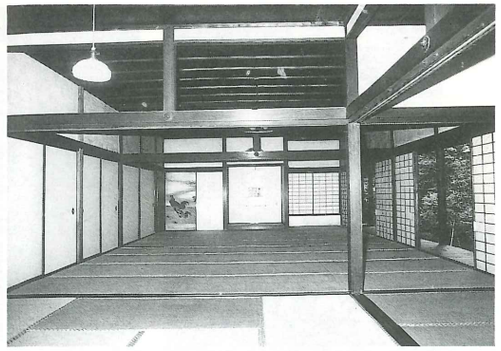
冷泉貴実子

冷泉家は、公家の流れをくむ和歌の家です。皇居が東京に移った後もその住居を移さず、現在に至りました。明治以後、周囲の公家屋敷は次々と同志社大学にかわり、今日我が家は三方を同志社大学の高層建築に囲まれ、故入江相政氏の言をかりれば「四面楚歌」ならぬ「三面耶蘇」と相成りました。塀に添って建つビルは全く腹立たしい存在ですが、毎朝どこからか流れる耶蘇の歌は、一服の清涼剤です。残る一面は車であふれる今出川通をはさんで緑濃い御所の森です。

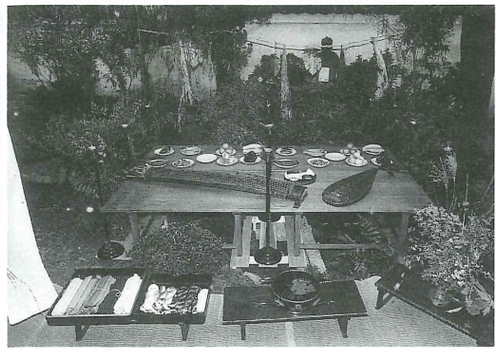
冷泉家がこの地に移り住んだのは、現在地に御所が造営されたすぐ後の慶長５年（1600）ですから、江戸時代を通して私の先祖は、今より狭かった今出川通を渡り、わずかな供をつれて毎日、摂家、宮家あるいは宮中と現在の京都御苑を忙しく歩きまわって、主に和歌に関する御用をする、いわゆる公務員でありました。

平安時代より宮廷では、和歌は特別な位置を占めてきました。それは宮廷での重要な教養であり遊びであると同時に、和歌を神仏に手向けることは宮中の儀式でした。ここに儀式としての和歌会が成立したのです。冷泉の家は、この儀式としての和歌会を司ってきました。そして歌の道が家に伝えられました。

現在、門人が集まって行われている月次の和歌会は、旧くから伝えられる題によって、四季を大切に和歌を詠む（作る）会です。また詠まれた和歌は独特の節で歌う披講の式によって皆に披露されます。



冷泉家は、公家屋敷として京都に現存する唯一の遺構である。



七夕の歌会、乞巧奠の祭壇、星の座。宮廷文化の伝統が伝えられている。（写真提供：冷泉家時雨亭文庫）

なかでも新年の歌会始と乞巧奠という七夕の歌会は、大切にされてきました。乞巧奠は、庭に星への祭壇を設け、その前で披講と当座の和歌会をする行事です。今年７月皇太子御夫妻の行啓があり、その星の座という祭壇を御覧に入れ、この絵が現在も小御所の襖に描かれていることを御説明すると、大変興味をおもちの御様子でした。

明治まで御所では、こんな行事が行われていたのでしょう。

（冷泉家当主夫人）

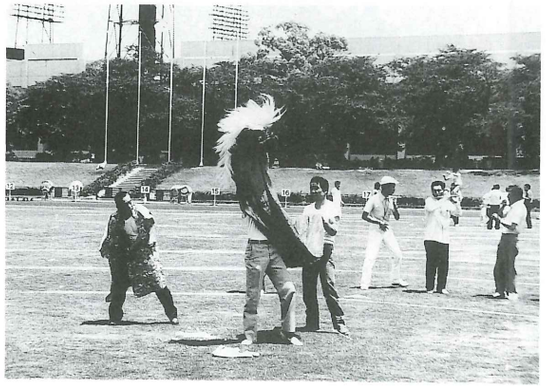
文化財あれこれ（１）

京都国体を控えて

渡辺泰男

このたび第43回国民体育大会秋季大会の開会式のセレモニーに、京都の伝統芸能であり国の重要無形民俗文化財の指定を受けております六斎念仏が、８保存団体合同にて出演させて戴くことになり、私達六斎念仏保存団体の一員といたしましては誠に有意義であり又、歓びにたえません。

想えば、千年の歴史を有する六斎念仏は、空也上人が仏教思想教化のため始められたものですが、長い年月、過去幾多の先輩諸兄があらゆる困難をのりこえて現在に伝えたものであります。明治初期には、50組の六斎念仏があったといわれております。現在は、空也系９団体、千菜系５団体合計14団体に減少いたしました。幸い、昭和52年山中前会長のもと保存団体連合会を結成、京都府、市のご尽力ご協力により昭和54年、無形の民俗文化財として選択を受けるにいたり、昭和57年には重要無形民俗文化財の指定を受けました。ただ、近年急激な都市化又、社会経済事情の変化にともない保存継承はしだいに困難になりつつあります。このような現状のなかで、今回の国体出演が今後の保存継承に大きな役割を果たすものと期待いたしております。



京都国体を控えての練習風景　開会式のセレモニーで伝統文化とスポーツの融合が表現される。

京都の代表的な伝統芸能「六斎念仏」（写真は、小山郷六斎念仏）

上演曲目は、念仏踊り保存曲中メーン曲の獅子と土蜘蛛に決定いたしました。この曲は、全曲の長さ20分を要する曲ですが、今回時間的な都合により４分に短縮しての上演又、曲の内容も各保存会におきまして少し異なるところもあり、その点が苦労です。幸い、昨年末より国体局の指導により合同練習会、リハーサル等重ねてまいり、その不安も少しは解消してまいりました。今後、練習を重ね本番に備えたいと思っております。

何分、全国から多数の参加者、そしてあの広いグランドでの上演、喜びと不安あいなかばの心境です。しかし、京都の伝統芸能を全国の皆々様に観賞して戴き千年の都、京都にふさわしいものになればと存じ上げます。最後になりましたが、京都国体の成功を祈念いたします。

（京都六斎念仏保存団体連合会会長）

京の伝統行事芸能（15）

二十五菩薩お練り供養法会

京都の秋は、伝統的な行事や芸能が数多くおこなわれますが、そのなかでも毎年10月第２日曜日真言宗泉涌寺山内の即成院でおこなわれる二十五菩薩お練り供養法会は、絢爛豪華な特異な行事として知られています。

このお練り供養は、阿弥陀如来や二十五菩薩が衆生を救うため極楽浄土から現世に来迎するという平安時代の来迎思想を表現したものであり、江戸時代中期に起源をもつといわれています。

来迎思想は、恵心僧都が寛和元年（985）に「往生要集」を著わし、極楽浄土に往生することを説いたことに始まったもので、それ以後盛んになり当時の人々は極楽浄土に往生することを願い、来迎図像を多く作って祀ったといわれ、

当即成院の本堂には、本尊阿弥陀如来坐像及び二十五菩薩像（いずれも重要文化財）が安置され、当時の来迎信仰があらわされています。

また、当寺を中心として念仏講、念仏踊も盛んになり、和讃歌が多くつくられ二十五菩薩お練り供養法会の際には、この来迎和讃にあわせて観音、勢至の両菩薩の極楽浄土の舞が本堂でくりひろげられます。

二十五菩薩お練り供養法会　本堂を極楽浄土とし、境内の地蔵堂を現世になぞられて、その間に高さ２メートル余の橋をかけ渡し、二十五人の稚児が菩薩装束を着けお練りをおこなう。

二十五菩薩お練り供養法会について

平野暎哉

京都東山泉涌寺即成院では、毎年10月中旬の日曜日、本年は10月９日午後１時から、二十五菩薩お練り供養法会がおこなわれます。

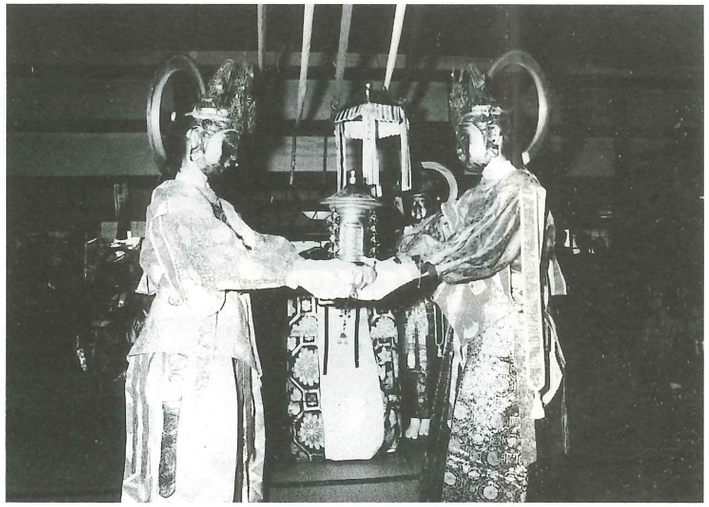
このお練り供養は、当院本尊阿弥陀如来及び二十五菩薩の本誓を具現したもので、平安末期より起った仏教の来迎思想、即ち阿弥陀如来二十五菩薩が、極楽浄土の世界から現世に来迎して、衆生を安養浄土に導入する姿を具象化したものです。

この日は当院本堂を極楽浄土とし、境内の地蔵堂を現世になぞらえて、その間に高さ２メートル余の掛橋をかけ渡し、100人近い稚児達が菩薩さんに献華と百味（山海の珍味）のお供えの後、泉涌寺一山の僧侶が総出仕、読経の中に二十五人の児童達が金襴の菩薩装束を着け、御本尊と同じく天蓋、幡や笙、篳篥等の楽器類を持ち、本堂（極楽浄土）から地蔵堂（現世）に来迎し、衆生済度の後、本堂へ還列し呑海講中の来迎和讃に合わせて、観音、勢至両菩薩の極楽浄土の舞が繰り広げられ、阿弥陀如来の後に従い極楽浄土へ引接していく姿を絢爛絵巻風に執り行われます。

即成院　重文　木造阿弥陀如来及び二十五菩薩坐像

なお、当院には那須与市公の墓があり、この阿弥陀如来が守り本尊として知られ、特に本年は与市の八百回忌にあたり、５月８日には筑前琵琶の上原まりさんによって、那須与市の弾き語りや扇の的を射落す弓道の奉納試合が行われました。

（即成院住職）



即成院呑海講中による来迎和讃にあわせて、くりひろげられる極楽浄土の舞。

京の主な年中行事（10月～12月）

10月

1～5日	瑞　饋　祭	北野天満宮
	1日　午前9時　神幸祭 4日　午前10時　還幸祭	
8～9日	春　日　祭	春日神社
	11日　午後2時　神　幸　祭 12日　午前10時　例祭及び神輿渡御祭	
9日	二十五菩薩お練り供養法会（午後1時）	泉涌寺即成院
9～10日	粟田神社大祭	粟田神社
15日	9日　午後6時　夜渡神事 10日　午後1時　神幸祭	
10日	八瀬赦免地踊（午後8時）	八瀬秋元神社
10日	秋季金比羅大祭（午前10時）	安井金比羅宮
10日	六孫王神社例祭（午後1時）	六孫王神社
10・11日	講員大祭	伏見稲荷大社
	10日　午前11時　島原太夫道中 11日　〃　狂言	
14～16日	引声阿弥陀経会（午前9時～午前10時）	真如堂
16日	新日吉神宮例大祭（午前10時）	新日吉神宮
16・17日	日向大神宮例祭	日向大神宮
	16日　午後2時　外宮大祭 17日　〃　内宮大祭	
19～21日	二十日ゑびす大祭	恵美須神社
	19日　午後8時　宵ゑびす祭 20日　午後2時　ゑびす講大祭	
22日	鞍馬火祭（午後6時頃）	由岐神社
23日	岩倉火祭（午前2時）	岩倉石座神社
25日	抜穂祭（午前11時）	伏見稲荷大社
29日	余香祭（午後2時）	北野天満宮

11月

1日	亥子祭（午後5時）	護王神社
1～30日	七五三詣り	市内各神社
3日	曲水の宴（午後2時）	城南宮
3日	狸谷不動院秋季大祭（午前11時）	狸谷不動院
3～23日（日・祝日のみ）	秋の業平塩竈まつり（午後2時）	十輪寺
5～15日	十日十夜別時念仏会（午後6時～午後7時）	真如堂
8日	火焚祭（午後2時）	伏見稲荷大社
13日	嵐山もみじ祭（午前10時30分～正午）	嵐山渡月橋付近
14日	火焚祭（午後4時）	新日吉神宮
15日	法住寺大護摩供（正午）	法住寺
16日	火焚祭（午後2時）	恵美須神社
23日	火焚祭（午後1時）	車折神社
23日	もみじ祭（午後2時）	地主神社
23日	筆供養（午後2時）	東福寺正覚庵
26日	御茶壺奉献祭（午前11時）	北野天満宮

12月

1日	献茶祭（午前10時30分）	北野天満宮
4日	終い大国祭（午後1時）	地主神社
7・8日	大根だきと成道会法要（午前10時～）	千本釈迦堂
8日	針供養（午後1時）	法輪寺
8日	針供養（午後1時）	針神社
9・10日	鳴滝の大根だき（午前9時～）	了徳寺
10日	終い金比羅	安井金比羅宮
14日	義士まつり（午前10時毘沙門堂出発）	山科
14日	義士会法要（午前11時）	法住寺
21日	終い弘法	東寺
25日	終い天神	北野天満宮
25日	御身拭式（午後1時30分）	知恩院
31日	おけら詣り	八坂神社

※都合により行事中止又は日程が変更される場合があります。

六孫王神社例祭

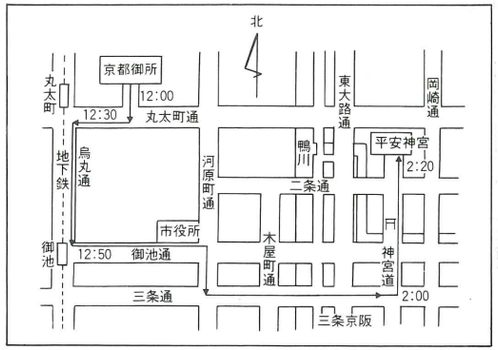
北野天満宮余香祭

火焚祭

義士まつり

時代祭　10月22日(土)

京の三大祭の掉尾を飾る時代祭が、10月22日におこなわれます。京都が都であった延暦から明治にいたる1,100年の各時代の代表的文物風俗を有名人物や行事によって行列を組み、一巻の歴史風俗絵巻が都大路にくりひろげられます。



◻壬生大念仏狂言

日　時：10月8日(土)～10月10日(月・祝)
　　午後1時～6時
料　金：大人800円　中高生600円　小人400円
場　所：壬生寺狂言堂

◻嵯峨大念仏狂言

日　時：10月23日(日)　午後1時～4時30分
　　―無料―
場　所：清涼寺（嵯峨釈迦堂）内　狂言堂

◻京都御所秋の一般公開

日　時：11月5日(土)～11月9日(水)
　　午前9時～午後3時

この期間中は、一切の手続きなしで参観できます。

◻第24回未公開文化財特別拝観

期　間：11月1日(火)～11月10日(木)
時　間：午前9時～午後4時
拝観料：1ヶ寺　600円
主　催：(財)京都古文化保存協会
〈お問い合わせ（075)561－1795〉

寺院名		主な文化財	備考
大徳寺	芳春院	本堂・呑湖閣・山水庭園	1日～10日公開 6日休み 北区大徳寺
	聚光院	方丈襖絵・茶席・庭園	〃
	興臨院	本堂・茶室・庭園	〃
	黄梅院	本堂・襖絵・庫裡・茶室・庭園	〃
法然院		殿舎・本堂・襖絵	1日～7日公開 左京区鹿ヶ谷
霊鑑寺		書院襖絵・人形・庭園	1日～10日公開 左京区鹿ヶ谷
大雲院		本堂・鐘楼・祇園閣	1日～30日公開 東山区祇園町
高台寺		霊屋・開山堂・茶室 史跡・庭園	1日～30日公開 東山区下河原町
妙心寺	三門浴室	三門・十六羅漢像・浴室	1日～10日公開 右京区妙心寺
	隣華院	障壁画	〃
	天球院	方丈・障壁画・茶室	〃
	退蔵院	方丈・庭園・茶席	〃
	衡梅院	方丈・鐘楼・障壁画 茶席	〃

□京都市文化財ブックス
○『京都の木～歴史のなかの巨樹名木～』
（B5版、約80ページ、1,000円・送料別）
○『伏見の酒造用具』
（A4版、約150ページ、1,500円・送料別）

○『京の古仏～里にいきづくみ仏たち～』
（Ｂ５版、約85ページ、1,000円・送料別）
□『京都の六斎念仏』
（Ｂ５版、約253ページ、2,500円・送料別）
□『京都のやすらい花』
（Ｂ５版、約86ページ、1,200円・送料別）

会員の皆様方で上記の調査報告書を領布ご希望の方は、当財団事務局にて取り扱っていますのでお問いあわせ下さい。

1989年版 文化財カレンダーのお知らせ

テーマ「京の名園と建造物」

京都の代表的な文化財をとりあげ企画しています文化財カレンダー昭和64年版は「京の名園と建造物」と題し、古建築と庭園の調和された美しさを表現し、作成いたします。

会員の皆様方でカレンダー配布ご希望の方は、下記の要領によりお申し込み下さい。

■規　　格　Ｂ３サイズ・７枚もの（表紙含む）
６色刷カラー

■申込方法　文化財カレンダー申込及び住所、氏名（法人の場合は、法人名と代表者名）を記入のうえ、切手350円分（郵送料）を同封し、封書によりお申し込み下さい。

■申込期限　11月30日まで

■申 込 先　〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町
京都会館内
京都市文化観光資源保護財団宛

㊟○申し込み資格は、当財団会員に限ります。
○申し込み部数は、１人につき１部とします。
○なお、申し込み多数の場合は、抽選となりますのでご了承下さい。
○カレンダーの発送は、12月上旬の予定です。

第52回　文化財特別参観のご案内

"賀茂別雷（上賀茂）神社"と"錦部家旧宅（西村家別邸）"

今回は、京都で最も古い神社の一つ、賀茂別雷（上賀茂）神社と上賀茂の社家として庭園に昔の面影をとどめる錦部家旧宅（西村家別邸）を訪ねます。

回参観日時　昭和63年12月３日（土）
午後２時（参観時間約２時間）

回対 象 者　財団募金協力者（会員）とその家族１名（計２名まで）

回申込方法　住所・氏名・年令を記入し、返信用切手60円分を同封の上、封書によりお申し込み下さい。

回申 込 先　〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町
京都会館内
京都市文化観光資源保護財団宛

回参加費不用

※お問いあわせは、財団事務局まで。なお、参加ご希望が多い場合は、制限することがあります。

編集後記

２巡目の初回国体「京都国体」が始まりました。この秋季大会では、開会式のセレモニーをはじめスポーツ芸術として、京都の伝統芸能が期間中各イベントの中で幅広く紹介されます。歴史のなかで伝え、まもられてきた京都ならではの伝統芸能のよさを全国の方々にも十分味わっていただけるものと思います。皆さんもこれらのイベントをどしどしご覧いただきたいと思います。そして、京都国体へのご支援ご声援をお願いいたします。

―差別をなくして明るい社会をつくろう―